映画「劒岳 点の記」を地元紙は全力で応援しています

プロフィール／神田由香
平成17年北日本新聞社入社。
同年，編集局文化部配属。
平成19年から芸能担当。

平成19年10月3日。映画「劒岳 点の記」のロケを立山連峰で行っている撮影隊を取材するため，北アルプス・劒沢を訪れた。先輩の写真部記者に励まされながら，立山・室堂から約6時間かかって，剣沢小屋（2500メートル）に到着。移動は非常に苦しかったが，現場の熱気を感じ，原作に思いをはせることができた貴重な日々だった。

「ここまでやっているのか」。撮影を終えて剣沢小屋に向かってくる撮影隊の姿を見た時，そう思わずにはいられなかった。出演する浅野忠信さんと香川照之さん，仲村トオルさん，小市慢太郎さんをはじめ，木村大作監督，スタッフが雨具を着込み，足場の悪い山道を歩いてきたからだ。

険しい山々を背景に，荒い息を吐きながら歩いてくる撮影隊。以前から木村監督が「大自然の中を豆粒みたいな人間が歩いているのを見ると，涙が出るよね。悠久の自然と人間の人生のはかなさを感じられる映画にしたい」と熱弁していたが，まさしく，それを体感した一瞬だった。

さらに「苦行」のような日々を送っているのは，第一線に向かう撮影隊だけではないということも取材を通して分かった。劒沢に向かう途中，食料を調達するために室堂を目指すスタッフと昼にすれ違い，再会したのは夜だった。一日がかりで山を往復し戻ってきたスタッフ。山小屋では，撮影が10月中旬までの小屋のシーズンを超えて長引く場合を想定し，ポリタンクに水をためるスタッフの姿もあった。「一つの目標に向かって努力する仲間たちの物語」を現場でも見せつけられた。

案内人の宇治長次郎役を演じる香川さんが「登山用品も充実していない時代。当時を考えると，頭が下がる思いがする」ともらしたように，原作に描かれた測量隊への敬意も，俳優とスタッフの間に漂っていたように思う。「登山は登れば終わり，測量は登ってからが仕事」とは木村監督の弁だが，仲間とともに，命じられた難事業を成し遂げようとした主人公の柴崎らの姿は，効率や利益ばかりを追求しがちな今の日本に，大切なものを気付かせてくれると信じたい。

写真－1
劒岳南壁での撮影を終えて剣沢小屋に戻る，手前から俳優の浅野さん，香川さん，仲村さん，小市さんとスタッフ　（平成19年10月3日，北アルプス・劒沢）

写真－2
剱岳南壁から戻り，リラックスした表情を見せる，右から仲村さん，浅野さん，香川さん，小市さん　（平成19年10月3日，剣沢小屋）

写真－3
剱岳南壁での撮影を終えて剣沢小屋に戻る撮影隊
（平成19年10月3日，北アルプス・剱沢）

昨年12月末には主人公，柴崎芳太郎（浅野忠信さん）の妻，葉津よ役に宮﨑あおいさん，柴崎の先輩で剱岳登頂を計画するも成し遂げることができなかった元ベテラン測量官の古田盛作役に役所広司さんが決まったと発表された。二人の富山県内でのロケの予定はないが，松田龍平さんら新たなキャストを加えた登山シーンの撮影は4月から再開する。

木村監督が五十年という映画人生をかけて映し出す自然美と人間ドラマを地元紙として応援したい。そして世界遺産登録を目指す立山連峰の美しさが，全国に発信されることを期待している。

（北日本新聞社編集局文化部
神田 由香）

写真提供：北日本新聞社